

【教科のわく(社会科)】

日本の小学校・中学校・高等学校の教育課程は、学習指導要領によって、おおまかには「教科」と「特別活動」の二大領域制をとっていて、これに「道徳」や「総合的な学習の時間」がとりたてられた領域としてつけ加えられているところがあるわく組みになっっています。

もともと日生連は、コア・カリキュラム連盟として、「何をコアとしたカリキュラムにするか」が出発の問題意識で、一九五一年段階では、コアにこだわることから脱却し、「三層四領域論」を提案していました。だから日生連から言えば、学習指導要領の教育課程のわく(領域構造)は、実験的に探究されるカリキュラムのわく組みの一案にすぎなかったわけです。

「社会科」も現在は、小学校三年生からはじまって中学校までで、高校ではなくなっています(「地理歴史」と「公民」)。

コア連でカリキュラム全体に関わって議論してきた

生活教育 キーワード

「問題解決学習」について、それを「社会科」であると狭くしてしまったのが馬場四郎で、この見解がコア連での議論をも狭めてしまいました。そしてそのコア連版「社会科」を「教科」として、一九五五年には学習指導要領に対置できる『社会科指導計画』にまで

まとめてしまいます。その後一九五四年以降での中学社会科を三分野に分け、小学校六年で通史を置くような「社会科」に丸木政臣は批判的で、「たとい現在ののような社会科の形が望ましくないにしても、私たちはそのしくみのなかで最善をつくさなくてはならない」と述べ、歴史教育の立場から、「社会科」のわくの中でも「日本をさらに発展させる愛情と勇気ある人間を育てる」努力を重ねました。

(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 春田正治『日生連物語 戦後生活教育運動のうねり』民衆社、一九八八年。特に四十五ページ。
- ② 丸木政臣『歴史教育と人間形成』(丸木政臣教育著作選集第二巻 歴史教育論)澤田出版、二〇〇七年所収、原本一九五八年)。特に六三ページ。